

コロナ感染者が再拡大するモスクワ

西山 美久

6月に入りモスクワ市内の感染者が急増している。6月13日には7704人の新規感染者が確認された。市内の感染状況悪化を受けてソビヤニン・モスクワ市長は6月13日からショッピングモールのフードコート、レストラン、カフェ等の営業時間を23時まで短縮するほか、6月15日から5日間、市内の民間企業を休日にするといった緊急の措置を発表した。

ところが、6月19日には過去最多の9120人の新規感染者が確認されたため、市内では感染対策が実施されることになった。ソビヤニン市長は、6月28日から市内のカフェやレストラン等の飲食店の屋内席を利用するには、①コロナワクチン接種済みであること、②PCR検査の結果が陰性であること、または③過去6ヶ月以内にコロナ罹患歴があること、のいずれかを証明するQRコードを事前に取得することを義務付けた。これはモスクワ市に住む全ての人が対象になっており、このコードがないと入店拒否される。なお、飲食店の屋外席（テラス席）を利用する際には、7月11日までQRコードが不要とされた。飲食業界からは当該措置で客足が遠のくとして、不安や反発の声が上がった。

写真は市内のショッピングモールにあるファーストフード店である。QRコード取得が義務化されたためか、店内で食事する人は誰もいない（筆者撮影）。他



方、テイクアウトの場合はQRコードが不要のため、レジの前に行列ができています。中には、注文した品を受け取るとショッピングモール内の休憩スペースで食事する人もおり、感染対策になっているのか微妙な感じであった。

外食のためだけにQRコードを取得するのは煩雑でどうにかできないかと思っていたところ、ソビヤニン市長は飲食業界からの反発を考慮したのか、7月19日に各種規制を解除し、カフェやレストラン等の通常営業を認めた。その代わりにコロナワクチンの接種が半ば強制されることになった。背景にはワクチン接種率の低さが関係している。モスクワ市はサービス業者や飲食業者に対して、8月半ばまでに従業員の60%以上のワクチン接種を命じた。

ワクチン接種は18歳以上の外国人労働者も対象となった。接種可能なワクチンは「スプートニクV」ではなく「スプートニク・ライト」とされ、一回の接種で完了となる。価格は一人あたり1300ルーブル（日本円で約1950円）。接種可能な場所は市内の市立診療所のほか、1980年モスクワオリンピックのメイン会場であったルジニキ・スタジアムとされた。

モスクワでは感染者が再度増加したが、市内の通りではマスクを付けずに歩く人も散見される。ロシアでは感染力の強い新たな変異株が出現しており、今後の状況を注視したい。（北海道大学）

白系ロシア人クラフツォフの足跡

倉田 有佳

「北海道道南会」の会報『道南』（令和3年夏号）に「白系露人の昔話」が綴られている。執筆者の森本貞子氏にとって函館は、母親の実家があり、5歳になるまで過ごした場所だ。昭和16（1941）年、女学校三年生の夏休み、例年のごとく函館に遊びにやってくるが、足を痛めた祖母の湯治に付き添い、函館郊外の湯の川温泉に逗留することになる。旅館の湯槽で「コラチコフ」（クラフツォフのこと）の妻と偶然出会う。翌日、美味しいと評判の苺ジャムを目当てに「白い洋館」を訪れた。1瓶80銭と高価な「コラチコフ苺ジャム」は当時貴重品だった。一人2瓶までの決まりとなっていたが、「トーキョーからのムスメ」には特別に3瓶売ってくれた上、「重いから」と、ピンを提げて旅館まで「スタスタと速足で」送ってくれた。80年前の思い出を描いたこの一文に刺激され、クラフツォフに光を当ててみようと思立った。

アレクサンドル・ステパノヴィチ・クラフツォフ（写真）

は、1892年8月26日ヴェルフネグレコヴォ村（現ロストフ州）に生まれた。1924年10月、日本にやってくる。翌年9月、函館郊外の湯の川（当時は湯川村・現函館市）に居を定めた。函館市西部のハリストス正教会付近は、ロシア革命を逃れてきた白系ロシア人が集住していたが、市街地から6キロ以上離れた湯の川や団助沢では、1914年秋頃から旧教徒が自給自足の生活を営んでいた。

英語とロシア語を教え始めたクラフツォフを



外務省外交史料館所蔵
(分類番号3.9.5.25)

「私のロシア語の教師」と呼び、団助沢附近の「三室の家に住み、ロシア人らしい造作で、カーテンをロシア式に張り、ロシア婦人と住んでいた」。「父が彼にサモワールを贈り、彼は私にトルストイとドストエフスキーの本を呉れた」と回想するのは、函館出身で、パイコフ『偉大なる王』を訳した長谷川澗（しゅん）である。「ロシア婦人」は、1929年9月に神戸で結婚したスサンナ・イワノヴナのことであろう。

いつ頃からか、ジャムを手がけるようになる。1935年6月には上海に商談に赴きドイツ系商会とジャム類の取引をまとめ、ジャム用の缶を函館の日本製罐に発注している。上海在住ロシア人と牧草を取引（輸出）し、鮭缶を取扱っていた頃の肩書は、「食料商」「貿易商」「仲買人」だ。

1932年秋、ロシア極東の収容所から小舟に乗って集団脱走したソ連人の囚人が北海道沖に漂着すると、救済・支援に動いた。1943年に結成された「函館露西亜人協会」の副会長を務めた。

函館駅近くの商業地区に暮らすズヴェーレフ家と親しくしていた。同家の二女ガリーナ（1933年生、1940年離函）は、クラフツォフが大きなキイチゴの農場を経営し、上等なジャムを作っていた、と回想する。四女オリガ（1940年生、1954年離函）は、函館空襲（1945年6月）後、クラフツォフ家に一時疎開していたことを覚えている。夫妻が湯の川を去った時期について確かなことはわかっていない。

（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）